

学位論文の要約

論文題目 戦国期京都の将軍権力と寺社

申請者 佐藤 稜介

本論文は、戦国期における室町幕府の姿を、将軍権力と寺社を手がかりにして考察するものである。

まず、序章「戦国期幕府研究の現状と課題」では、研究の現状を整理し、本論文を通して検討する課題を設定する。戦国期の幕府研究は、今谷明氏による「京兆専制」論、「堺幕府」論の提唱を画期として、細川京兆家をはじめとした幕府政治に関与する守護権力の分析と、戦国期でも維持された幕府機構の検証という二つの方面に進展してきた。近年は、浜口誠至氏や馬部隆弘氏によって、京兆家の分析を軸にしつつ、二つの議論を止揚する方向性を持つ研究が進められている。

本論文では、戦国期の幕府に対する分析視角として、将軍権力と寺社に着目する。足利将軍家家督が有した将軍権力については、明応の政変を画期に義澄派と義植派に分裂したと評されている。これにより、将軍権力の実態は、単なる将軍職改替の歴史ではなく、複線的に変遷する別個の権力の総体として論じるべきものとなった。京兆家研究の豊富な成果を取り入れながら、それぞれの将軍権力の存在意義と影響力を評価しなくてはならない。

寺社については、室町期では、顕密や禅宗の寺院と幕府との関係を軸に研究が進んできた。対して戦国期では、一向一揆や法華一揆などの民衆運動の結集核としての姿が主に検討されている。対象とする寺社に懸隔が生じており、幕府との関係を見る視角にも統一を欠く点に課題が残る。この解消にこそ、戦国期の幕府研究を前進させる糸口が見出せるのである。

さらに、将軍権力と寺社という二つの視角を有機的に結びつけるために、両者の結節点であった幕府奉行人にも注目する。幕府奉行人は、将軍権力の下、幕府機構の最前面で寺社などの領主との交渉を担当していた。戦国期における幕府内外での活動実態を明らかにすることが求められている。

以上の研究視角に基づき、各章の議論を展開する。

第一章「三宝院持厳考」では、戦国初期に三宝院の門主となった持厳の活動を通じて、室町幕府の宗教政策上最も重要な寺院である醍醐寺三宝院と将軍権力との関係を検討した。持厳は明応の政変後の抜擢、突然の三宝院追放と山口への下向、足利義植に同道した上洛など、戦国初期の政局に密接に関与したが、先学は基礎的な事項さえ明かさない。

随心院門主として宗教界に登場した持厳は、明応の政変に伴う三宝院門主の追放という非常事態を受けて、三宝院を兼帯する。これは将軍家との俗縁を持たない三宝院門跡が登場した点で、きわめて特殊であった。足利義澄政権期では一定期間、三宝院門跡を務めるもの

の、細川京兆家による醍醐寺への武力行使を受けて、三宝院を離れる。持麩の入室は異例であったが、入室後の展開からも、将軍権力と三宝院が支え合う構造の変容が見て取れる。その後の持麩は、義植の招請を受けて山口に下向し、義植の上洛時には御加持役として宗教面からこれを支える。上洛後は、三宝院を中核とする武家護持の体制を、義植のもとで復活させた。義植上洛の立て役者としての持麩の姿から、戦国期においてなお将軍権力を支える三宝院の役割を明らかにした。

第二章「明応の政変後の幕府と寺社」では、明応の政変後に三宝院を含む寺社が破却されたという事実を出発点に、政変が京都近郊の寺社に与えた影響と、その後の政権と寺社の関係を検討した。戦国期の幕府研究では、政権内で顕密の寺社が果たした役割を等閑視する。たとえ三宝院が政変で焼き払われたとしても、それを戦乱的一幕としか理解しない。

政変前の三宝院は、室町期以来の相依関係を将軍との間で結んでいた。しかし、政変後の混乱の中で、この関係は事実上破綻する。これを導いた義澄政権は、義植の縁者に対する警戒心から、場当たりの強圧的な対応を、寺社に対して繰り返す。これにより、幕府と寺社の間に混乱が生じたのである。一方、義植政権は、三宝院持麩の取り込みを図り、寺社領保護の政策を明確に打ち出す。室町期以来の諸宗共存を実現するために、方針を転換したのである。幕府と寺社の関係が政権中枢の意志によって揺れ動き、そして相依関係の解消へと向かい始めたひとつの画期として、明応の政変を評価した。

第三章「戦国期における幕府奉行人家の分裂」では、明応の政変の後、幕府奉行人が分裂し、非在京の将軍権力の下で奉行人奉書が発給される状況を概観し、奉行人分裂の歴史的な意義を論じた。先学は、奉行人の分裂現象が40年にわたって再生産された理由を用意しない。

非在京の幕府奉行人は、「義材奉行人」「義澄奉行人」「義植奉行人」「義維奉行人」と整理できる。さきがけとなった「義材奉行人」は、特定の氏族に偏らないという特徴を持ち、その多くが、義澄政権下で同族別流の幕府奉行人の台頭に直面していた。「義澄奉行人」以降の奉行人にも、概ね同様の構図が見られる。ただし、義植と共に上洛し、同族筆頭の地位を得た奉行人は、その後出奔した義植に従うことはない。奉行人としての存在基盤が離京する将軍個人に強く依存している場合や、在京する将軍権力の交代によって立場が危うくなる時、奉行人は出奔したのである。奉行人が欲したのは、同族嫡流の地位と、経済基盤であった。武力行使に頼らない奉行人が見せた、非在京の将軍権力への積極的な帰参は、家流存続と地位向上の手段だったのである。

第四章「戦国期幕府奉行人の経済基盤」では、経済基盤の整理から幕府奉行人の存立状況を検討した。戦国期においては、幕府経済の崩壊という既定路線に引きずられて、奉行人の経済基盤は意識的に論じられない。しかし、文書発給に伴う職能給を幕府機構の外部から獲得できる奉行人は、幕府経済の一端を担う勢力として分析が欠かせない。

戦国期の奉行人は、幕府内外の要因により経済的に困窮したが、在地の勢力を動員しながら積極的な所領経営を展開していた。さらに、京都では荘園領主との関係を深化させること

で、別奉行に付随する得分をも拡大させていた。新たな経済基盤として洛中の都市収入に触手を伸ばし始めた点も、戦国期の特徴と言える。戦国期の幕府奉行人は、武家や荘園領主を圍繞する広範な人間関係を駆使して、多彩な生存戦略を展開した。こうして、自身の存立基盤である幕府経済を制度的に支える役割を果たしたのである。

第五章「戦国期における将軍権力の分裂と出訴先の展開」では、自領の維持や所職の確保に奔走する領主たちの姿に焦点を当て、将軍権力の分裂という状況下で彼らがどのような勢力に文書を請求したのか検討した。戦国期における出訴先としては、幕府法廷と京兆家法廷が知られている。ただし、これまでの研究では対象時期が異なり、相互の関連性を意識的に論じる視点も欠く。

将軍権力に対する出訴では、流浪の身である義植勢力が選択肢に上がるという状況が、明応の政変後に現出した。一方、京兆家法廷は義植の上洛という将軍権力の交代を契機に、幕府の裁定をも相対化する出訴先として選択され始める。「堺公方」府の成立に象徴される上位権力の動揺は、在地での紛争を増加させる。領主らは、京都進駐軍のごとき存在をも、出訴先として選択するようになるのである。将軍権力の分裂と在京勢力の交代に対処するため、領主たちが柔軟に出訴先を選択したことによって生じた変化を、連続的に把握した。

補論「家原寺縁起附属文書一卷について——狩野内膳書状・片桐且元奉行人書状・山内忠義寄進状ほか——」では、武家権力と絵画制作者との関係を照らし出すことを目的に、堺市の家原寺に所蔵される「行基絵伝」とその附属文書との関係を検討した。

附属文書に残る狩野内膳書状と片桐且元奉行人書状の分析を通じて、豊臣家が内膳による「行基絵伝」の借用を媒介していたことが明らかになった。この借用の目的は、豊国社臨時大祭の盛儀を伝えるという使命を帯びた、豊国祭礼図屏風の制作にあったと考えられる。この一卷の文書は、祭礼図屏風の制作という共通の目的に向かって奔走する、近世の武家官僚と絵師の姿を描き出す。

最後に、終章「成果と課題」では、序章で設定した課題に照らして各章の議論を整理し、本論文の意義づけを行う。その上で、今後の課題とすべき論点を展望した。結論は以下のとおりである。

戦国期の将軍権力については、明応の政変を経て二派に分裂していた事実もさることながら、京都周辺の社会集団がこの状況を利用して権益を拡大しようとしたことが重要である。とりわけ、出訴先の選択に見える領主らの戦略は、新たな法廷や裁定者を京都に生み出した。将軍権力に対する認識の変化が社会構造の変容をもたらしたのである。

寺社との関係は、将軍権力の正統性を評価する基軸であり、今後ますます論点としての重要性を増す。戦国期では、将軍権力に動揺が生じた結果、義澄政権のような、寺社との関係構築を志向しない権力が成立する。一方で、義植は、三宝院持厳を介して寺社を取り込み、宗教儀礼を演じさせて自身の凱旋を荘厳したのである。このように、寺社との関係は武家権力の特徴を評価する上で有用である。特に、室町期に重要な役割を果たした顕密寺院との関係にこそ、権力の性格を通時的に論じる手がかりを見出せる。

幕府奉行人は、将軍権力が分裂する状況にあっても、これを逆手に取って生存競争を展開した。文書発給という本務に従事しつつ、寺社などの領主との関係を独自に深めており、また、積極的な所領経営によって幕府経済を支えていた。将軍権力の影響を直接受ける奉行人集団は、幕府の存在形態を探る上で看過できないほどに、主体的に活動したのである。